

令和5年度 弱視グループのまとめ

1 研究主題 「見え方に応じた視覚補助具の利活用と教材の工夫について」

2 研修内容

	日時	内容
第1回	5月12日(金)	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について
第2回	6月16日(金)	協議 ・実践事例様式とグループの視点について ・障害種別研修会の講師と講話の内容について
第3回	7月4日(火)	事例検討1回目(4名)
第4回	8月7日(月)	障害種別研修会「見え方に応じたタブレット端末の効果的な利活用について」 富山高等専門学校 秋口俊輔 氏
第5回	8月29日(火)	事例検討1回目(3名)
第6回	10月3日(火)	事例検討2回目(全員)
第7回	11月7日(火)	協議 ・学校訪問研修会グループ別研修会の協議内容と進め方について
臨時	11月15日(水)	学校訪問研修会打ち合わせ
学校訪問	11月17日(金)	協議 ・弱視に関する視覚障害教育の専門性について(実践事例を通して)
第8回	12月7日(木)	協議 ・実践事例のまとめ ・今年度の研究のまとめと次年度に向けて
第9回	1月16日(火)	協議 ・今年度の研究のまとめと次年度に向けて
第10回	2月7日(水)	協議 ・次年度の研究の進め方について

3 今年度のまとめ

見えにくさを補うための視覚補助具を適切に利活用したり、教材を工夫したりすることで、学習効果を高めたり、学習場面以外の家庭や進路先にも活用の場を広げたりするなど、主体的に学習に取り組むことにつながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

見え方とキャリア発達の視点から実践に取り組んだことは、児童生徒にどのような力を身に付ける学習活動なのか、何をどのように工夫したらよいかなど、自分たちの行っている支援を改めて振り返る機会となった。タブレット端末等の視覚補助具の利活用や教材の工夫が有効であることが分かったが、視覚補助具の選び方や使い方などは、児童生徒の見え方や実態に合っていたのかどうかという課題が残った。

今後、一人一人の見え方に応じた支援を行うために、指導する教員に必要な視覚障害教育の専門性として、眼疾患の理解や実態把握の仕方、実態に即した視覚補助具の選定を行う力を身に付けることが必要ではないかと思われる。

4 次年度に向けて

「見え方に応じた視覚補助具の利活用と教材の工夫について」を研究主題として、研究を継続する。見え方とキャリア発達に関する実践事例に取り組み、弱視に関する専門性について学ぶ。
○仮説：児童生徒の実態を丁寧に把握し、見えにくさに応じた視覚補助具の選定や利活用、教材の工夫をすることで、学習効果を高めたり、学習場面以外の家庭や進路先にも活用の場を広げたりするなど、主体的に学習に取り組むことにつながるのではないか。

○1学期：実態把握について、グループ研修を行う。

- ・対象生徒の眼疾患の理解、対象生徒の見え方の体験
- ・視力検査(遠視力検査、近視力検査、最大視認力検査、最適文字サイズの検査)について
- ・視覚補助具の種類、使い方、選定方法について 等

○2学期：各自、実践事例に取り組む。また事例を持ち寄り、グループで検討する。

令和6年度 弱視グループのまとめ

1 研究主題 「見え方に応じた視覚補助具の利活用と教材について」

2 研修内容

	日時	内容
第1回	5月10日(金)	協議 ・グループの研究主題と研究の進め方について
第2回	6月12日(水)	研修 ・対象児童生徒の眼疾患について ・対象児童生徒の見え方、見えづらさを体験しよう
第3回	7月29日(月)	障害種別研修会 「視覚補助具の紹介と使い方について」 三和メディカル株式会社 齊藤新治 氏
第4回	9月6日(金)	事例検討1回目(全員)
第5回	11月20日(金)	事例検討2回目(全員)
第6回	12月19日(木)	協議 ・今年度の研究のまとめ ・全日盲研の発表について
第7回	2月4日(火)	協議 ・次年度の研究について ・全日盲研の発表について

3 今年度の成果と課題

昨年度の研究から、タブレット端末等の視覚補助具の利活用や教材の工夫が有効であることが分かったが、視覚補助具の選び方や使い方などは、児童生徒の見え方や実態に合っていたのだろうかという課題が残った。一人一人の見え方に応じた支援を行うために、指導する教員に必要な視覚障害教育の専門性として、眼疾患の理解や実態把握の仕方、実態に即した視覚補助具の選定を行う力を身に付けることが必要だと考えた。

そこで今年度は、児童生徒の実際の見え方について理解を深めるために、各自の対象児童生徒の眼疾患について調べ、視野欠損の体験レンズを着用して教科書を読む、板書の文字を視写する、階段を昇降するなど、児童生徒の見え方や見えづらさを体験する研修を行った。事例検討ではこの研修を生かし、活発に意見交換をすることができた。しかし、教育に活かせる視力検査をしたり、医療機関の検査結果を読み取ったりするなどの専門性について、力不足を痛感した。

また、外部講師による視覚補助具の紹介や体験、使い方に関する講話から、学校や社会生活の中で、どのように視覚補助具を使えばよいかを具体的に想定することができた。

今回の実践では、学習場面以外に活用を広げることができなかったが、活用に向けての可能性に気付くことができた。卒業後の生活を見据えて、児童生徒が視覚補助具の特長を理解し、活用しようとする気持ちを高める指導が大切であることが分かった。

4 研究のまとめ

児童生徒の実態を丁寧に把握し、見えにくさに応じた視覚補助具の選定や利活用、教材の工夫をすることで、学習効果を高めたり、学習場面以外の家庭や進路先にも活用を広げたりするなど、主体的に学習に取り組むことにつながるのではないかと考え、本テーマを設定した。

小学部から高等部までの児童生徒を対象とした実践を共有したことで、年齢や発達段階に応じて必要な視覚補助具や活用方法、教材や支援の工夫について、幅広く学び合うことができた。タブレット端末をはじめ、見え方に応じた視覚補助具や教材が学習効果を高め、有効であることを確かめることができた。また、児童生徒自身にも、その有効性を実感し、利活用していこうとする姿がみられた。

今後、児童生徒が、視覚補助具を主体的に活用し、豊かな人生を送るためには、見え方への配慮と将来の家庭生活や進路先等の生活を想定し、具体的に場面設定して、視覚補助具の利活用の仕方を指導する必要がある。